

中学3年生のストレス状況下における二次元レジリエンスと外在化・内在化問題の関連

学校構想サブプログラム

渡邊 昂太

【指導教員】 中井 大介 萩生田 伸子 山田 文

【キーワード】 資質的レジリエンス 獲得的レジリエンス 外在化問題 内在化問題 ストレッサー

問題と目的

近年中学校において、心に関連した問題が増加傾向にある。文部科学省(2024)の令和5年度児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要によると、中学生によるいじめや不登校は過去最多となっている。また、暴力行為や自殺といった問題行動も同様に、令和3年度以降高い水準を維持している。文部科学省(2024)の調査時におけるアンケートの結果から、登校意欲の低下や、不安・抑うつなどの心理的な要因が関連していると考えられる。いじめにおいては、伊藤(2017)により、自己評価・受容の安定さ、前向きさが被害経験に、自尊感情の低さが加害経験に結びつくとして明らかにされている。

問題行動の背景には、生徒たちが日常的に受けるストレスが影響している。岡安他(1992)は、中学校において、教師生徒間の関係や、友人間のつながりといった人間関係の問題、学業や委員会活動等の学校生活における問題、学校で定められたルールや規則が、ストレスとして機能していることを指摘した。また、岡安他(1992)は、友人関係や学業ストレスと、抑うつや不安感情、無力的認知・思考の関連を報告している。小谷・玉木(2019)は、部活動ストレスや友人関係ストレスが、攻撃性に影響を及ぼすことを指摘している。

さらに、山城・小泉(2000)は、性格特性・学年差とストレス反応の検討を行った。結果より、中学3年生は、他学年に比べストレスコーピングをとれるようになるが、エゴグラムをもとに分類された6つの性格特性に関わらず、ストレス反応が高くなることが明らかとなった。受験を控える学年という特徴が影響していると考えられ、3年生に焦点を当てた研究が求められる。

このようなストレス状況下において、生徒が示す問題は、外在化問題と内在化問題に大別される(Achenbach, 1991)。

山形他(2006)は、外在化問題を、注意散漫や攻撃行動、反社会行動と定義している。さらに、石川・濱口(2007)は、身体的攻撃と関係性攻撃、村山他(2015)は、攻撃性と非行性を取り上げており、概して外向的問題行動と捉えられる。文部科学省(2024)が示すいじめや暴力行為は、他者に対する攻撃である。また、五十嵐・萩原(2002)は、遊び・非行に関連する不登校傾向が、学校享受感と負の相関、遅刻と正の相関を示すことを明らかにしており、非行が学校現場における外在化問題として捉えられると考えられる。攻撃性

は、Baron & Richardson(1994)が述べる、他者に対して直接害を与えたり、傷つけたりすることを目的とする行動と定義する。また、非行は、藤田(2006)が述べるような、不良交友、反社会的行動といった社会集団からの逸脱行動が当てはまるが、具体的な非行行動を行う中学生の割合は非常に低い(小保方・無藤, 2006)。そこで本研究では、「非行場面に接近しようとする傾向」(近藤, 2004)と定義する。

内在化問題は、先行研究において、不安や恐怖、抑うつ、自傷行為、欠席傾向(石川・濱口, 2007; 村山他, 2015; 山形他, 2006)と定義されており、内向的問題行動を包含する。村山他(2015)は、いじめ加害者が抑うつ傾向を示すことを指摘している。また、藤本他(1999)は、高うつ者、高不安者が登校意欲の低さを示すことを報告しており、教育現場での問題行動との関連が考えられるため、内在化問題として不安と抑うつを取り上げる。Barnard(2018)により、抑うつは、対象に対する環境からの強化を失わせ、日常機能の困難を生む、行動・運動症状、認知症状、社会的症状、生物学的症状を含んだ多因子疾患であると定義されており、本研究でもこの定義を用いる。不安に関しては、中学3年生が人生におけるステップアップの時期であることを鑑み、山本(1992)が述べるような、人間的成長にポジティブ・ネガティブの影響を与える心理特性と定義する。

先行研究により、内在化問題と外在化問題の関連が指摘される(上野他, 2008; 笹谷・玉木, 2024; 山形他, 2006)ことから、生徒の問題行動を扱う際は、複合的な視点が求められると考えられる。

こうした問題行動を抑制する要因として、近年、レジリエンスという概念が注目されている。レジリエンスは、多くの研究において、ストレスの苦痛から立ち直る強さ(石毛・無藤, 2006)や、「精神的回復力」(小塩他, 2002)など、心理的な落ち込みから立ち直る回復力(平野, 2012)として定義されている。小塩他(2002)の研究では、精神的回復力が高い者は、ネガティブなライフイベントを経験しても、自尊心を高く維持できると指摘している。石毛・無藤(2005)は、受験期の中学生を対象にした検討で、「楽観性」と「自己志向性」がストレス反応を抑制すると報告している。

さらに、レジリエンスは、個人がもつ素質から由来する「資質的要因」と、後天的に身につけることが可能な「獲得的要因」の2つに分類することができる(平野, 2010)。

平野(2010)は、資質的レジリエンス要因として「楽観性」「統御性」「社交性」「行動力」の因子を見出し、ストレス

がかかると場面において、感情に振り回されず、周囲のサポートを受けながら、新たな目標に向け気持ちを切り替えることができる力と定義している。さらに、獲得的レジリエンス要因について、「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」の因子を見出し、自分や他者の気持ちを理解し、ストレス状況を改善する意志を持つことで、解決につながる力と定義した。両要因の妥当性は、双生児法によって確認された(平野, 2011)。

平野(2012a)は、抑うつとの関係について、獲得的レジリエンス要因・資質的レジリエンス要因のどちらにおいても、負の相関を示すことを報告した。平野(2012b)は、資質的レジリエンスが、心理的敏感さによりもたらされるリスクに対して、補填的な役割を担うことを報告している。櫻庭他(2023)は、資質的レジリエンスが、男女に関係なく、不登校行動の強化子に対して負の影響を与えることを報告している。また、獲得的レジリエンスに関して、一部の下位尺度が、女子の不登校行動の強化子に対してのみ負の影響を与えることを指摘している。

しかし、これらの研究では、中学生を対象としたレジリエンスと問題行動の関連を検討した研究は限られている。また、レジリエンスと問題行動の関連が示されてきたものの、単一概念としての検討に留まっており、レジリエンスを獲得的・資質的に区別した検討は十分ではない。さらに、レジリエンスが本来必要とされるストレス状況下での検討は限られており、そうした場面において、レジリエンスがどのように問題行動に影響を及ぼすのかを検討した研究は不足している。そこで、本研究では、中学3年生を対象に、ストレス状況下における二次元レジリエンスと外在化・内在化問題の関連を検討することを目的とした。

先行研究に基づき、以下の仮説を設定した。

仮説1 先行研究により、ストレスと問題行動の正の関連、レジリエンスと問題行動の負の関連、レジリエンスとストレス反応の負の関連がそれぞれ報告されている。また、斉藤(2015)は、不注意、多動性・衝動性の行動傾向がネガティブイベントを誘発し、自尊心が低下することで、内在化問題を引き起こすという二次的問題の発現可能性を示している。これより、レジリエンスによって自尊心を維持することで、二次的問題を予防することができると考えられる。以上のことより、ストレス状況下における生徒は、レジリエンスと外在化・内在化問題の負の関連を示すと予測される。

仮説2 岡本・菊島(2019)は、二次元レジリエンスの「自己統制力」と「楽観性」が、ストレス反応を直接的、間接的に低減することを明らかにした。また、先行研究(小林他, 2019)から、レジリエンスの下位概念によって、不登校傾向との関連性が異なると指摘されていることから、二次元レジリエンスと外在化・内在化問題との関連において、下位尺度ごとに異なる関連が示されると思われる。

仮説3 平野(2013)により、男女によって有意に影響を

及ぼすレジリエンス要因が異なることが報告されている。また、櫻庭他(2023)の研究では、二次元的レジリエンスが不登校に及ぼす影響の男女差が述べられており、二次元レジリエンスと他の問題行動との関連において、同様の傾向が想定される。

方法

実施時期

2025年10月に実施された。なお、本実験は、国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理委員会が定める倫理審査申請マニュアルに従い、所定のチェックリストを用いて確認を行った。その結果、本研究は介入を伴わない匿名の調査であり、調査者に対する危機が最小限であることから、倫理審査の申請を要しない研究に該当すると判断した。

調査対象者

埼玉県内の公立中学校において、中学3年生を対象に調査を行った。調査では、303名から回答を得た。全ての項目に対し同一の回答を行った者を、回答の信頼性の観点から除外し、男子155名、女子140名、無回答6名の計301名を分析対象者とした。

調査手続き

質問紙による調査を行った。調査の際、質問紙は無記名とし、調査の結果や不参加により回答者に不利益が生じないこと、答えられない項目には、無理して回答する必要がないことをフェイスシートに明記し、口頭での説明も行った。

調査内容

ストレッサー 岡安他(1992)の作成した中学生用ストレッサー尺度を用いて、経験頻度と嫌悪性について、4件法により回答を求めた。しかし、嫌悪性を評価する際の、ストレッサーに対する主観的評価よりも、ストレス経験頻度の方が、本研究における「ストレス状況下」をより反映していると判断した。そこで、本研究では、ストレス状況下を「学校ストレッサー経験頻度が高い状態」として操作的に定義し、分析には経験得点のみを用いた。なお、原尺度の作成者により、研究目的に基づき一方の得点を用いることが認められている(岡安他, 1994)。

使用項目は以下の通りである。「教師との関係」(例:先生が自分を理解してくれなかった。),「友人関係」(例:クラスの友だちから、仲間はずれにされた。),「部活動」(例:部活動で、先生や先輩からしごかれた。),「学業」(例:試験や通知表の成績が悪かった。),「委員活動」(例:いやな仕事や苦手な仕事をやらされた。)因子のうち、それぞれの因子負荷量上位3項目と、「規則」(例:校則をやぶってしかられた。)の3項目の計18項目を使用した。なお、質問項目の一部は、調査協力校からの要請を踏まえ、倫理的観点から表現を修正した。「教師との関係」因子の「先生に

うらぎられた。」を「先生が期待に答えてくれなかった。」に変更した。「友人関係」因子の「誰かにいじめられた。」を「誰かにいじわるされた。」に変更した。

二次元レジリエンス 平野 (2010) の作成した二次元レジリエンス尺度を用いた。資質的レジリエンスの「楽観性」(例:どんなことでも、たいてい何とかなりそうな気がする。), 「統御力」(例:つらいことでも我慢できる方だ。), 「社交性」(例:交友関係が広く、社交的である。), 「行動力」(例:自分は粘り強い人間だと思ふ。)のそれぞれ3項目の計12項目を用いた。獲得的レジリエンスは、「問題解決志向」(例:人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする。), 「自己理解」(例:自分の性格についてよく理解している。), 「他者心理の理解」(例:思いやりを持って人と接している。)のそれぞれ3項目の計9項目を用いた。資質的レジリエンスと獲得的レジリエンスの計21項目を用いて、5件法により調査を行った。

内在化問題 Goodman (1997) が作成した Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) (子どもの強さと困難さアンケート) の11歳~17歳用のアンケートを使用した。SDQは、各国の言語に翻訳されたものが Goodman のホームページ (<https://www.sdqinfo.org>) に公開されている。「行為の問題」, 「情緒の問題」, 「多動/不注意」, 「仲間関係の問題」, 「向社会的な行動」の5つの下位尺度のうち、「情緒の問題」(5項目, 例:私は、心配事が多く、いつも不安だ。)を使用した。3件法により実施された。

併せて、佐藤他 (2001) の作成した多次元抑うつ不安症状尺度 (MDAS) より、「ネガティブ情動」(例:落ち込んでいる), 「生理的覚醒」(例:体の感覚が麻痺したりむずむずしたりする), 「ポジティブ情動」(例:機敏に動く)の因子負荷量上位4項目の計12項目を使用し、4件法により回答を求めた。

外在化問題 安藤他 (1999) の作成した日本版 Buss-perry 攻撃性質問紙(BAQ)を用いた。本研究においては、「身体的攻撃」(例:挑発されたら、相手をなぐりたくなるかもしれない), 「短気」(例:いらいらしていると、すぐ顔に出る), 「敵意」(例:私を嫌っている人は結構いると思う), 「言語的攻撃」(例:自分の権利は遠慮しないで主張する)から、因子負荷量上位2項目の計8項目を使用した。回答方法は5件法であった。

また、近藤 (2004) の作成した非行接近/抑制尺度より、非行接近尺度を採用し、「自己中心性」(例:自分のためなら、多少人の迷惑になることでもやる方だった。), 「刺激興奮性」(例:多少はめをはずしても、刺激のある方が楽しかった。)から、因子負荷量の上位3項目を使用した。4件法により調査を行った。

分析方法

本研究の分析では、IBM SPSS Statistics を用いて行った。欠損値はごく少数であったことから、平均値代入法を用いた。

重回帰分析において、回帰係数の信頼区間の推定には、ブートストラップ法 (サンプル数 1,000) を用いた。また、多重共線性を確認した結果、一部の変数は除外された。

結果

変数の基礎統計量とt検定の結果 まず、各変数の基礎統計量を算出した。各変数の平均値および標準偏差を Table 1 に示す。次に、性差の有無を確認するため、対応のないt検定を実施した (Table 1)。結果、男女間において、資質的レジリエンス要因の「社交性」と「統御力」、外在化問題の「言語的攻撃」と「身体的攻撃」の4因子において有意差が認められ、いずれも大きい効果量を示した ($d=0.81-1.17$)。また、獲得的レジリエンス要因の「問題解決志向」、内在化問題の「情緒の問題」、ポジティブ情動、外在化問題の「自己中心性」、「刺激興奮性」の5因子も有意に異なり、その効果量は中程度であった ($d=0.50-0.79$)。その他の因子には有意差は認められなかった。

Table 1
男女の各変数の平均値・標準偏差およびt検定の結果

	男子		女子		t値	d
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)		
1. 楽観性	4.15 (0.67)	4.04 (0.77)	4.15 (0.67)	4.04 (0.77)	1.31	0.72
2. 社交性	3.90 (0.81)	3.38 (1.00)	3.90 (0.81)	3.38 (1.00)	4.79 ***	0.91
3. 行動力	3.92 (0.85)	3.90 (0.81)	3.92 (0.85)	3.90 (0.81)	0.25	0.83
4. 統御力	3.69 (0.86)	3.39 (0.74)	3.69 (0.86)	3.39 (0.74)	3.28 **	0.81
5. 他者心理の理解	3.96 (0.70)	4.08 (0.68)	3.96 (0.70)	4.08 (0.68)	-1.54	0.69
6. 自己理解	3.80 (0.69)	3.66 (0.72)	3.80 (0.69)	3.66 (0.72)	1.67	0.70
7. 問題解決志向	3.97 (0.74)	3.79 (0.76)	3.97 (0.74)	3.79 (0.76)	2.05 *	0.75
8. 行動の問題	1.31 (0.25)	1.26 (0.20)	1.31 (0.25)	1.26 (0.20)	1.80	0.22
9. 情緒の問題	1.43 (0.43)	1.71 (0.57)	1.43 (0.43)	1.71 (0.57)	-4.77 ***	0.50
10. 生理的覚醒	1.21 (0.37)	1.21 (0.43)	1.21 (0.37)	1.21 (0.43)	-0.11	0.40
11. ネガティブ情動	1.38 (0.59)	1.50 (0.68)	1.38 (0.59)	1.50 (0.68)	-1.69	0.64
12. ポジティブ情動	2.53 (0.68)	2.29 (0.64)	2.53 (0.68)	2.29 (0.64)	3.05 **	0.66
13. 短気	2.12 (0.99)	2.01 (0.84)	2.12 (0.99)	2.01 (0.84)	1.00	0.92
14. 敵意	2.70 (1.03)	2.81 (0.94)	2.70 (1.03)	2.81 (0.94)	-0.97	0.99
15. 言語的攻撃	3.42 (1.08)	2.95 (0.96)	3.42 (1.08)	2.95 (0.96)	3.91 **	1.03
16. 身体的攻撃	2.58 (1.27)	1.99 (1.04)	2.58 (1.27)	1.99 (1.04)	4.32 ***	1.17
17. 自己中心性	1.63 (0.62)	1.35 (0.55)	1.63 (0.62)	1.35 (0.55)	4.17 ***	0.59
18. 刺激興奮性	2.10 (0.85)	1.65 (0.72)	2.10 (0.85)	1.65 (0.72)	4.88 ***	0.79
19. 教師との関係	0.31 (0.51)	0.27 (0.43)	0.31 (0.51)	0.27 (0.43)	0.77	0.47
20. 友人関係	0.29 (0.54)	0.20 (0.41)	0.29 (0.54)	0.20 (0.41)	1.72	0.49
21. 学業	1.12 (0.91)	1.17 (0.92)	1.12 (0.91)	1.17 (0.92)	-0.50	0.92
22. 規則	0.41 (0.61)	0.32 (0.48)	0.41 (0.61)	0.32 (0.48)	1.44	0.55
23. 委員活動	0.50 (0.68)	0.50 (0.68)	0.50 (0.68)	0.50 (0.68)	0.02	0.68
24. 部活動	0.40 (0.65)	0.37 (0.59)	0.40 (0.65)	0.37 (0.59)	0.50	0.62

*** $p<.001$,** $p<.01$,* $p<.05$

男女の各変数の関連 各変数の関連の性差を検討するため、Pearson の積率相関分析を探索的に実施した (Table 2,3)。

男子の場合、レジリエンスと問題行動の間に、多くの有意な相関が見られた。「情緒の問題」因子は、全てのレジリエンス因子との間に有意な負の相関を示した ($r=-.19--.41$)。また、「敵意」因子も同様に、全てのレジリエンス因子と負の相関を示した ($r=-.18--.38$)。さらに、プラスな意味の項目により構成された「ポジティブ情動」は、全てのレジリエンス要因と有意な正の相関を示した ($r=.34-.48$)。一方で、「生理的覚醒」因子とレジリエンス因子との間の有意な相関は確認されなかった。「身体的攻撃」と有意な相関が認められた因子は、資質的レジリエンス要因である「行動力」($r=-.21, p<.05$)と「統御力」($r=-.17, p<.05$)に限定された。また、「自己中心性」因子と「刺激興奮性」因子との

Table 2
男子の各変数の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
1. 楽観性	—																								
2. 社交性	.58**	—																							
3. 行動力	.51**	.51**	—																						
4. 統御力	.44**	.51**	.69**	—																					
5. 他者心理の理解	.48**	.53**	.51**	.54**	—																				
6. 自己理解	.32**	.25**	.36**	.30**	.46**	—																			
7. 問題解決志向	.52**	.50**	.58**	.47**	.58**	.46**	—																		
8. 行動の問題	-.11	-.17*	-.21**	-.24**	-.24**	-.08	-.12	—																	
9. 情緒の問題	-.24**	-.28**	-.34**	-.41**	-.19*	-.30**	-.24**	.28**	—																
10. 生理的覚醒	.05	-.01	-.14	-.03	-.01	-.11	-.07	.20*	.40**	—															
11. ネガティブ情動	-.13	-.09	-.33**	-.20*	-.12	-.28**	-.25**	.26**	.65**	.53**	—														
12. ポジティブ情動	.48**	.38**	.45**	.35**	.34**	.40**	.43**	-.16	-.30**	.03	-.28**	—													
13. 短気	-.14	-.20*	-.16	-.38**	-.25**	-.19*	-.08	.46**	.37**	.10	.28**	-.16*	—												
14. 敵意	-.18*	-.32**	-.38**	-.34**	-.21*	-.30**	-.19*	.32**	.53**	.25**	.44**	-.26**	.58**	—											
15. 言語的攻撃	.29**	.22**	.02	-.01	.12	.27**	.36**	.12	-.04	.08	-.04	.17*	.22**	.11	—										
16. 身体的攻撃	.04	.02	-.21*	-.17*	-.11	-.20*	-.04	.36**	.26**	.27**	.28**	-.12	.46**	.34**	.20*	—									
17. 自己中心性	-.00	-.03	-.20*	-.10	-.03	-.10	-.07	.27**	.35**	.11	.29**	-.08	.34**	.31**	.17*	.43**	—								
18. 刺激興奮性	.08	.09	-.20*	-.05	.05	-.06	.00	.24**	.23**	.14	.19*	-.04	.24**	.27**	.22**	.49**	.68**	—							
19. 教師との関係	-.06	.07	-.05	-.06	-.03	-.13	.00	.29**	.22**	.26**	.31**	.08	.37**	.29**	.16	.21**	.17*	.09	—						
20. 友人関係	-.06	-.11	-.22**	-.21*	-.09	-.13	-.06	.28**	.42**	.24**	.41**	-.08	.30**	.48**	.15	.25**	.35**	.23**	.49**	—					
21. 学業	.00	.04	-.08	-.02	-.04	-.21**	-.17*	.12	.32**	.28**	.36**	-.14	.17*	.17*	.03	.29**	.18*	.18*	.37**	.28**	—				
22. 規則	.15	.14	.01	.13	.13	.01	.21**	.36**	.10	.32**	.19*	.17*	.18*	.15	.24**	.20*	.26**	.34**	.53**	.27**	.18*	—			
23. 委員活動	.16*	.22**	.05	.12	.08	-.01	.02	.03	.23**	.21*	.34**	.13	.10	.19*	.06	.16*	.17*	.15	.44**	.32**	.33**	.24**	—		
24. 部活動	.07	.07	.07	.09	-.08	-.06	-.02	.11	.02	.08	.12	.21**	.18*	.08	.03	.11	.05	.03	.61**	.29**	.37**	.30**	.41**	—	

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3
女子の各変数の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
1. 楽観性	—																								
2. 社交性	.36**	—																							
3. 行動力	.43**	.41**	—																						
4. 統御力	.47**	.43**	.52**	—																					
5. 他者心理の理解	.26**	.33**	.21*	.35**	—																				
6. 自己理解	.39**	.12	.30**	.34**	.51**	—																			
7. 問題解決志向	.45**	.48**	.46**	.57**	.55**	.45**	—																		
8. 行動の問題	-.12	-.12	-.08	-.22**	-.07	-.10	.01	—																	
9. 情緒の問題	-.23**	-.17*	-.13	-.27**	.10	-.15	-.16	.17*	—																
10. 生理的覚醒	-.19*	.02	-.16	-.05	.04	-.15	-.10	.15	.43**	—															
11. ネガティブ情動	-.43**	-.08	-.13	-.26**	-.03	-.24**	-.21*	.21*	.62**	.50**	—														
12. ポジティブ情動	.43**	.34**	.47**	.38**	.17*	.43**	.32**	-.03	-.40**	-.27**	-.37**	—													
13. 短気	-.07	-.07	.03	-.28**	-.17*	-.05	-.20*	.28**	.25**	.07	.22**	.01	—												
14. 敵意	-.16	-.18*	-.08	-.14	-.10	-.15	-.14	.16	.46**	.25**	.42**	-.32**	.36**	—											
15. 言語的攻撃	.18*	.16	.01	.01	-.10	-.00	.12	.15	-.13	.12	-.04	.14	.18*	.20*	—										
16. 身体的攻撃	-.01	-.11	.03	-.13	-.19*	-.09	-.12	.18*	.23**	.27**	.08	-.13	.44**	.31**	.32**	—									
17. 自己中心性	.00	.16	-.07	-.10	-.07	-.06	-.01	.43**	.31**	.35**	.25**	.03	.45**	.35**	.27**	.44**	—								
18. 刺激興奮性	-.04	.21*	-.10	-.04	-.04	-.16	.02	.35**	.33**	.31**	.24**	-.10	.37**	.28**	.32**	.36**	.65**	—							
19. 教師との関係	-.14	.07	-.07	-.01	-.04	-.18*	-.11	.11	.29**	.40**	.27**	-.17	.11	.27**	.06	.26**	.30**	.33**	—						
20. 友人関係	-.08	.09	.15	.09	-.10	-.04	-.03	.16	.29**	.39**	.34**	-.03	.17*	.27**	-.08	.28**	.23**	.24**	.39**	—					
21. 学業	-.14	.13	-.03	.01	.17*	-.01	-.08	.24**	.40**	.31**	.33**	-.25**	.17*	.27**	.03	.16	.28**	.39**	.20*	.32**	—				
22. 規則	-.26**	.01	-.14	-.08	-.05	-.13	-.12	.15	.29**	.08	.24**	-.15	.19*	.29**	.08	.21*	.39**	.40**	.29**	.26**	.37**	—			
23. 委員活動	.02	.09	.01	-.03	-.11	-.10	-.11	.01	.13	.40**	.20*	-.09	.13	.25**	.17*	.08	.18*	.10	.38**	.33**	.17*	.17	—		
24. 部活動	.13	.13	.16	.23**	.03	-.03	.22**	-.06	.17*	.20*	.07	-.14	-.03	.19*	-.03	.03	.09	.02	.07	.25**	.21*	.06	.19*	—	

** $p < .01$, * $p < .05$

有意な相関を示したのは、「行動力」に限られていた ($r = -.20, p < .05$; $r = -.20, p < .05$)。

ストレッサーと問題行動の間には、概ね有意な相関が認められた。ストレッサーの「規則」因子は、他の因子が相関を示さなかった、「ポジティブ情動」と「言語的攻撃」との間に有意な正の相関を示した ($r = .17, p < .05$; $r = .24, p < .01$)。

「部活動」因子が認められる有意な相関は、「ポジティブ情動」と「短気」に限定された ($r = .21, p < .01$; $r = .18, p < .05$)。

ストレッサーとレジリエンスの間には、ほとんど相関が見られなかった。特に、中程度以上の相関 ($|r| > .40$) を示す因子は認められなかった。

次に、女子の相関分析の結果を示す。レジリエンスと問題行動の検討の結果、「ポジティブ情動」因子は、全てのレジリエンス要因との有意な相関を示した ($r = .17-.47$)。一方で、「自己中心性」因子とレジリエンス要因の有意な相関は確認されなかった。「行動の問題」因子は、「統御力」と有意な負の相関を示した ($r = -.22, p < .01$)。「情緒の問題」因子は、「楽観性」、「社交性」、「統御力」と有意な負の相関を示した ($r = -.23, -.17, -.27$)。「ネガティブ情動」因子は複数の因子と有意の相関を示しており、特に「楽観性」との関連が強かった ($r = -.43, p < .01$)。「短気」因子は、「統御力」、「他者心理の理解」、「問題解決志向」との有意な相関が見られた ($r = -.28, -.17, -.20$)。「敵意」が示す有意な相関は「社交性」に限られる ($r = -.18, p < .05$)。「言語的攻

撃」は「楽観性」とのみ有意な相関を示した ($r = -.18, p < .05$)。

「身体的攻撃」は、「他者心理の理解」との有意な負の相関が確認された ($r = -.19, p < .05$)。「刺激興奮性」は、「社交性」との有意な負の相関を示した ($r = -.21, p < .05$)。

ストレッサーと問題行動の間には、概ね有意な相関が見られた。ストレッサーの「学業」因子は、他の因子が相関を示さなかった、「ポジティブ情動」との間に有意な正の相関を示した ($r = .25, p < .01$)。また、「委員活動」は、他の因子が相関を示さなかった「言語的攻撃」との有意な正の相関が見られた。「部活動」因子が認められる有意な相関は、「情緒の問題」と「生理的覚醒」に限定された ($r = .17, p < .05$; $r = .20, p < .05$)。

ストレッサーとレジリエンスの間にはほとんど相関が見られず、特に、中程度以上の相関 ($|r| > .40$) は示されなかった。

二次元レジリエンス、外在化・内在化問題に関する重回帰分析 男女別に相関分析を行った結果、レジリエンスと問題行動の関連が男女間で異なることが明らかとなった (Table 4)。そこで、男女別に重回帰分析を行い、各因子の独立した影響を検討した。

「行動の問題」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、女子においてモデルは有意であり、決定係数は.13であった。標準化係数を見ると、「社交性」および「統御力」は「行動の問題」を有意に説明していた。

「短気」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、男女ともにモデルは有意であり、決定係数は男子.20、女子.14であった。標準化係数を見ると、男子では「統御力」および「自己理解」が、女子では「行動力」および「統御力」が「短気」を有意に説明していた。

「敵意」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、男子においてモデルは有意であり、決定係数は.24であった。標準化係数を見ると、「社交性」および「行動力」は「敵意」を有意に説明していた。

「言語的攻撃」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、男子と女子ともにモデルが有意であり、決定係数は、男子が.28、女子が.12であった。標準化係数を見ると、男子では「楽観性」と「行動力」および「他者心理の理解」が、女子では「楽観性」および「他者心理の理解」が「敵意」を有意に説明していた。

「身体的攻撃」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、男子でモデルが有意であり、決定係数は、.12であった。標準化係数を見ると、「行動力」および「自己理解」は「身体的攻撃」を有意に説明していた。

「自己中心性」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、モデル全体は有意ではなかった。

「刺激興奮性」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、男女ともにモデルは有意であり、決定係数は、男子が.12、女子が.11であった。標準化係数を見ると、男子では「行動力」が、女子では「社交性」がそれぞれ「刺激興奮性」を有意に説明していた。

「情緒の問題」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、男子と女子ともにモデルは有意であり、決定係数は、男子が.23、女子が.18であった。標準化係数を見ると、男子の「統御力」、女子の「統御力」および「他者心理の理解」は「情緒の問題」を有意に説明していた。

「生理的覚醒」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、モデル全体は有意ではなかった。

「ネガティブ情動」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、男女ともにモデルは有意であり、決定係数は男子.16、女子.23であった。標準化係数を見ると、男子では「行動力」が、女子では「楽観性」が「ネガティブ情動」を有意に説明していた。

「ポジティブ情動」を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、男子と女子ともにモデルは有意であり、決定係数は、男子が.34、女子が.38であった。標準化係数を見ると、男子の「楽観性」、女子の「社交性」と「行動力」および「自己理解」は「ポジティブ情動」を有意に説明していた。

考察

本研究では、中学3年生を対象として、ストレス状況下における二次元レジリエンスと外在化・内在化問題の性差および変数間の関連について検討した。

まず、*t*検定の結果、獲得的レジリエンスおよび資質的レ

Table 4
諸問題に関する重回帰分析の結果

従属変数	独立変数	男子		女子	
		β	<i>t</i> 値	β	<i>t</i> 値
行動の問題	社交性	-.04	-0.38	.26 *	2.61
	統御力	-.12	-0.98	-.35 **	-3.20
	F値	1.82		2.92 **	
	R ²	.08		.13	
短気	行動力	.20	1.75	.24 *	2.32
	統御力	-.46 ***	-4.23	-.38 ***	-3.46
	F値	5.11 ***		3.17 **	
	R ²	.20		.14	
敵意	社交性	-.25 *	-2.52	-.15	-1.48
	行動力	-.28 *	-2.51	.07	0.67
	自己理解	-.40 **	-2.79	-.11	-0.67
	F値	6.35 ***		1.12	
言語的攻撃	楽観性	.22 *	2.30	.21 *	2.04
	行動力	-.31 **	-2.83	-.13	-1.29
	他者心理の理解	-.57 ***	-3.67	-.47 **	-2.70
	F値	7.89 ***		2.54 *	
身体的攻撃	行動力	-.27 *	-2.26	.14	1.35
	自己理解	-.31 *	-2.00	-.02	-0.13
	F値	2.75 *		1.24	
	R ²	.12		.06	
刺激興奮性	社交性	.14	1.33	.31 **	3.10
	行動力	-.45 ***	-3.74	-.18	-1.70
	F値	2.78 *		2.34 *	
	R ²	.12		.11	
情緒の問題	統御力	-.33 **	-3.10	-.23 *	-2.18
	他者心理の理解	.18	1.10	.46 **	2.74
	F値	6.14 ***		4.13 ***	
	R ²	.23		.18	
ネガティブ情動	楽観性	.05	0.52	-.40 ***	-4.25
	行動力	-.32 **	-2.74	.12	1.30
	F値	3.98 ***		5.75 ***	
	R ²	.16		.23	
ポジティブ情動	楽観性	.26 **	2.92	.16	1.87
	社交性	.07	0.75	.20 *	2.40
	行動力	.19	1.81	.25 **	2.92
	自己理解	.13	1.01	.44 **	3.18
	F値	11.70 ***		11.70 ***	
	R ²	.34		.38	

注) 表には有意な標準回帰係数のみを示した。

****p*<.001,***p*<.01,**p*<.05

ジリエンス要因、外在化問題および内在化問題要因の一部の因子に有意な性差が認められた。この結果は、外在化・内在化問題や二次元レジリエンスの現れ方が、性別によって異なる可能性を示唆している。一方で、ストレス要因には、有意な性差が認められなかった。岡安他(1992)が、「教師との関係」と「学業」において有意な主効果を確認しており、本研究に用いた尺度項目が少なかったことや、嫌悪性得点を用いなかったこと、学校環境の変化に伴うストレスの変容に起因する可能性があると考えられる。

*t*検定の結果を踏まえ、全体の構造を把握するため相関分析を行ったところ、レジリエンスと問題行動との有意な負の相関、ストレスと問題行動との有意な正の相関が認められた。特に、ストレスと問題行動の間には多くの有意な相関が見られ、先行研究(岡安他,1992;小谷・玉木2019)で述べられた学校ストレスと外在化・内在化問題との密接な関連を裏付ける結果となった。レジリエンスと問題行動の関連に関しては、男子において多くの因子間で有意な負の相関が見られたが、女子においては、有意な負の相関が一部見られるものの、限定的であった。本研究において得られた知見は、中学2年生以降、男子のレジリエンスが女子を上回るという上原他(2007)の報告と整合する。

一方で、ストレスとレジリエンスにおいては、多くの因子間において有意な相関は見られず、一部に限定された。この結果により、レジリエンスがストレスに対して、直

接影響を与えないという可能性が示唆された。また、仮説1において、ストレス状況下におけるレジリエンスと問題行動の関連性を提唱したが、ストレスと問題行動、レジリエンスと問題行動の関連は概ね認められるのに対し、ストレスとレジリエンスの関連は認められなかったことから、一律のモデルとすることには慎重を期する必要があると考えられる。

相関分析の結果、男女間の異なる相関の傾向が見られたことから、男女別に重回帰分析を行い、問題行動に関する各変数の影響を検討した。結果、問題行動に対して影響を及ぼす要因は、男女において異なることが明らかとなった。

男子の場合、特に強い影響が説明されたのは、「短気」に対する「統御力」、「言語的攻撃」に対する「他者心理の理解」、「刺激興奮性」に対する「行動力」である。外在化問題に対してレジリエンスが有効であり、資質・獲得的要因のどちらも機能していることがうかがえる。他方、「言語的攻撃」に対して「楽観性」が弱い正の影響を与えることが明らかとなった。渡邊・濱口(2025)により、誇大性自己愛と攻撃行動との関連が示されていることから、過度な楽観性は、攻撃行動に転じるという可能性が示唆された。

女子においては、「言語的攻撃」に対する「他者心理の理解」が強い負の影響を説明し、「ポジティブ情動」に対する「自己理解」が強い正の影響を示した。これは、女子の方が、ストレスの低減という点において、他者との感情の共有を大切にするという先行研究の知見を裏付ける結果となった(平野, 2013; 長田他, 2006)。外在化・内在化問題のどちらにおいても、獲得的レジリエンスが機能し、プラスの影響を与えるとともに、問題行動を抑制することが考察される。

一方で、「情緒の問題」に対する「他者心理の理解」は、強い正の効果を示した。これは、先に述べた先行研究(平野, 2013; 長田他, 2006)とは整合しない結果となった。Fabi et al. (2019)は、個人的苦痛とネガティブ情動傾向との正の相関を見出している。個人的苦痛は、他人の苦痛を見た際に、自分にも嫌悪的反応が表れる心理的機能である。他者の気持ちをくみ取ることが得意な女子は、他者の苦痛も取り込んでしまい、結果的に内在化問題を助長すると考察される。

また、本研究の結果は、「行動の問題」に対する「社交性」、「短気」に対する「行動力」、「言語的攻撃」に対する「楽観性」、「刺激興奮性」に対する「社交性」について、小から中程度の正の影響を説明している。女子中学生は、同調的な友人関係を築くことが多く(石本他, 2009)、同調性と関係性攻撃との関係が確認されている(尾棹, 2015)。つまり、社交性が高い女子は、同調性を伴った友人グループを形成しやすく、そのグループから排斥されないために、仲間の問題行動を肯定する、あるいは自らが行うようになり、結果的に問題行動の増加につながるという可能性を示唆している。

本研究における「行動力」の質問項目は、「決めたことを

最後までやりとおすことができる。」のように、粘り強さに焦点が当てられている。しかし、粘り強さを発揮する生徒は、その粘り強さが過度に強くなることで、完全主義者となり得る。齊藤他(2008)により、完全主義と敵意、短気との関連が述べられていることから、「楽観性」同様、過度な「行動力」には問題行動を助長する危険性ははらむことが考察される。

重回帰分析の結果、レジリエンスの下位尺度ごとに、影響を説明する問題行動の下位尺度が異なることが明らかとなった。また、男女差を見ると、同じ問題行動に対して異なる下位尺度が影響を及ぼしていることから、仮説2と仮説3を支持する結果となった。

まとめと今後の課題 第1の課題は、介入方法の検討である。本研究における相関分析や重回帰分析の結果から、問題行動を抑制する効果的な因子が、男女において異なることが明らかとなった。平野(2022)の介入プログラムをはじめ、レジリエンスの育成プログラムは多数存在するが、レジリエンス全体に焦点を当てた内容となっているため、問題を助長する因子を強化する可能性がある。介入方法の検討においては、一律のレジリエンス強化介入とせずに、それぞれの因子に対応した支援方を提案する必要がある。

第2の課題は、ストレスとレジリエンスモデルの再検討である。本研究においては、ストレスとレジリエンスの関連性が限定的であった。当初はレジリエンスを媒介として、ストレスから問題行動への影響を抑制すると想定していたが、有意な結果は見られなかった。このことから、例えば、認知やレジリエンス以外のパーソナリティ要因等の、何らかの剰余変数が働いていることが予想される。媒介変数を特定することで、教育現場における、生徒の問題行動抑制のより効果的な方策を示すことができるだろう。

最後に、本研究は、横断的研究として検討が行われたため、因果関係を述べるには限界がある。今後の研究において、因果関係を明らかにするため、縦断的研究を行う必要がある。また、本研究での対象が中学3年生限定であるため、中学生や思春期全般の傾向として一般化することができない。より広範囲の年齢を対象に加えることで、本研究の妥当性を検証する必要がある。

引用文献

- Achenbach, T. M. (1991). Manual for the Child Behavior Checklist/4-18 and 1991 profile. *University of Vermont, Department of Psychiatry*.
- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 *心理学研究*, 70(5), 384-392.
- Barnard, J. E. R. (2018). Depression: a review of its definition. *MOJ Addict Med Ther*, 5(1), 6-7.
- Baron, Robert A., & Richardson, Deborah R. (1994). *Human Aggression (Perspectives in Social Psychology)* (2nd ed.). Pleum Pub Corp.
- Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A

- research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 581-586.
- Fabi, S., Weber, L. A., & Leuthold, H. (2019). Empathic concern and personal distress depend on situational but not dispositional factors. *PLoS ONE*, 14(11), e0225102.
- 平野 真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次的レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成— パーソナリティ研究, 19(2), 94-106.
- 平野 真理 (2011). 中学生における二次的レジリエンス要因尺度 (BRS) の妥当性—双生児法による検討— パーソナリティ研究, 20(1), 50-52.
- 平野 真理 (2012a). 二次元的レジリエンス要因の安定性およびライフイベントとの関係 パーソナリティ研究, 21(1), 94-97.
- 平野 真理 (2012b). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討 教育心理学研究, 60, 343-354.
- 平野 真理 (2013). 中学生における資質的・獲得的レジリエンス要因の様相—学年差と性差の検討— 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 168.
- 平野 真理 (2022). レジリエンスの多面的プロフィール作成プログラムの検討: 非対面・非同時性のグループ・アプローチを用いて 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 22, 53-71.
- 藤本 光孝・繪内 利啓・有馬 道久・北濱 雅子 (1999). 中学生の学校ストレスに関する実証的研究: 登校意欲と不安・うつとの関連性 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 657.
- 藤田 宗和 (2006). 犯罪・非行とは 佐藤 達哉・岡市 廣成・遠藤 利彦・大淵 憲一・小川 俊樹 (編) 心理学総合辞典 (p.559) 朝倉書店
- 五十嵐 哲也・萩原 久子 (2002). 中学生における不登校傾向に関する研究 (1) —不登校傾向尺度の開発— 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 275.
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, 53, 356-367.
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2006). 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連 パーソナリティ研究, 14(3), 266-280.
- 石川 満佐育・濱口 佳和 (2007). 中学生・高校生におけるゆるし傾向性と外在化問題・内在化問題との関連の検討 教育心理学研究, 55, 526-537.
- 石本 雄真・久川 真帆・齊藤 誠一・上長 然・則定 百合子・日潟 淳子・森口 竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20(2), 125-133.
- 伊藤 美奈子 (2017). いじめる・いじめられる経験の背景的要因に関する基礎的研究—自尊感情に着目して— 教育心理学研究, 65, 26-36.
- 小林 朋子・渡辺 弥生・五十嵐 哲也 (2019). 小学生から高校生までの不登校傾向とレジリエンスとの関連 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 191.
- 近藤 日出夫 (2004). 非行接近/抑制尺度の作成および非行との関連の検討 犯罪心理学研究, 42(1), 1-14.
- 小谷 優花・玉木 健弘 (2019). 中学生の学校ストレスが学校享受感, 攻撃性ならびにストレスコーピングについての検討 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 666.
- 文部科学省 (2024). 令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要 文部科学省 Retrieved August 4, 2025, from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm
- 村山 恭朗・伊藤 大幸・浜田 恵・中島 俊思・野田 航・片桐 正敏・高柳 伸哉・田中 善大・辻井 正次 (2015). いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連 発達心理学研究, 26(1), 13-22.
- 小保方 晶子・無藤 隆 (2006). 中学生の非行傾向行為の先行要因—1学期と2学期の横断調査から— 心理学研究, 77(5), 424-432.
- 岡本 紳祐・菊島 勝也 (2019). レジリエンスが抑うつ的反すうを媒介としてストレス反応に与える影響の検討 日本心理学会第83回大会発表論文集, 412.
- 岡安 孝弘・嶋田 洋徳・丹羽 洋子・森 俊夫・矢富 直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関連 心理学研究, 63(5), 310-318.
- 岡安 孝弘・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (1994). 中学生の学校ストレスの測定法に関する一考察 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 296.
- 長田 春香・岩本 文月・大秦 加奈子・岡田 洋子・蒲原 由記・筒井 翔子・松井 希代子・関 秀俊 (2006). 中学生の日常的ストレスにおけるレジリエンスの意義 小児保険研究, 65(2), 246-254.
- 尾棹 万純・生川 良・川越 杏梨・嶋田 洋徳 (2015). 中学生における攻撃行動と共感性および同調性との関連性 教育心理学会第57回総会発表論文集, 646.
- 小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, 35(1), 57-65.
- 斉藤 彩 (2015). 中学生の不注意および多動性・衝動性と内在化問題との関連—学校ライフイベントと自尊感情を媒介として— 教育心理学研究, 63, 217-227.
- 齋藤 路子・沢崎 達夫・今野 裕之 (2008). 自己志向的完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討—抑うつ, ネガティブな反すうを媒介として パーソナリティ研究, 17(1), 60-71.
- 櫻庭 真弓・高木 源・狐塚 貴博・兪 幀蘭・若島 孔文 (2023). 解決構築とレジリエンスが中学生の不登校行動の機能に与える影響 学校心理学研究, 36(2), 113-125.
- 笹谷 愛望・玉木 健弘 (2024). 中学生の攻撃性と抑うつおよび学校不適応傾向との関連 日本教育心理学会第66回総会発表論文集, 460.
- 佐藤 徳・安田 朝子・児玉 千稲 (2001). 3要因モデルに基づく, 抑うつならびに不安症状の分類—多次元抑うつ不安症状尺度の作成— 性格心理学研究, 10(1), 15-26.
- 上原 明子・竹内 和子・宮本 友弘・島内 武 (2007). 中学生のレジリエンスに関する調査 (2) 日本心理学会第71回大会発表論文集
- 上野 真弓・丹野 義彦・石垣 琢磨 (2008). 抑うつ傾向と攻撃性との

関連——SDS と BAQ を用いて—— 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 295.

山形 伸二・菅原 ますみ・酒井 厚・眞榮城 和美・松浦 素子・木島 伸彦・菅原 健介・詫摩 武俊・天羽 幸子 (2006). 内在化・外在化問題行動はなぜ相関するか——相関関係の行動遺伝学的解析—— パーソナリティ研究, 15(1), 103-119.

山本 誠一 (1992). 青年期における不安の二側面に関する実証的検討 心理学研究, 63(1), 8-5.

山城 幸恵・小泉 令三 (2000). 中学生のストレス反応過程と性格特性・学年との関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 42.

渡邊 健蔵・濱口 佳和 (2025). 中高生のサイコパシー及び自己愛が道徳不活性化を介して攻撃行動に与える影響 パーソナリティ研究, 34(2), 228-242.

謝辞

本研究の実施にあたり、埼玉大学教育学部の中井大介先生には、多大なるご指導とご助言を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

また、本研究にご協力いただいた公立中学校の校長先生ならびに諸先生方、および生徒の皆様に、心より御礼申し上げます。